

マイクロセービングを通じた収入向上と民族和解のプロジェクト近況報告

「ジェノサイドから22年 ルワンダの和解と貧困削減」

ARC がルワンダの現地 NGO の ARTCF (ルワンダ女性クリスチャン労働者協会) がルワンダの農村で行っているマイクロセービングを通じた収入向上と民族和解プロジェクト (詳しくは活動レポート 2015 年 5 月号をご覧ください。ARC のホームページから見るができます。) の近況報告です。今回は津田塾大学生の下道佳織さんが現地へ赴き、レポートをしてきています。

1994 年 4 月に始まり、同年 7 月に終結を迎えるまでに約 80 万人が犠牲となったルワンダのジェノサイドから 22 年。マイクロセービング事業を通して、貧困からの脱却と和解醸成に取り組む人々を訪ね、マイクロセービングの効果を調査した。

○調査期間・方法

2016 年 2 月 23 日と 24 日にルワンダの南部州 (Southern Province) でフィールドワークを行い、23 日に Ruhango district (地区)、24 日に Nyamagabe district を訪問し、個別インタビュー、グループインタビュー、グループミーティングの見学を行った。

○ルワンダのマイクロセービングとは

トゥチ、フトゥ、トゥワというかつての民族関係なしに弱者をグループに取り込み、貧困削減だけでなくジェノサイドからの和解を目指す方法としても機能している。※ルワンダのマイクロセービングに関しては、2014 年 4 月の活動レポートにも書かれていますので、そちらもぜひご覧ください。

○貧困削減について

マイクロセービングは貧困からの脱却に大きく貢献している。南部州の Nyamagabe district のあるグループでは、一人が週に 200RWF (ルワンダフラン、1 円≒約 6 ルワンダフラン) ずつ貯め始め、現在は 600RWF ずつ貯蓄している。貯蓄したお金を使い、10 人が牛を、12 人が豚を、8 人が山羊を一頭ずつ購入できた。また、別のグループで 2010 年にマイクロセービンググループに参加した女性は、参加してから一年後に教育費、二年後に一頭の牛を得ることが出来、今まではバナナや豆、トウモロコシを栽培していたが、牛を得たことにより肥料が得られ、より多く収穫できるようになったと述べていた。

このように、マイクロセービングに参加することで生活が良くなったという声を多く聞いた。中には、マイクロセービングによって生活がどのくらい良くなったかという話を耳にし、自分でグループを立ち上げた女性もいた。また、貧困からの脱却だけではなく、家族計画を学べる、ジェンダーによる暴力の危険性をなくす、教育費を賄えるため、子どもの読み書きを可能にする、女性の発言権を得ることができるなど、マイクロセービングに取り組むことで様々な利点を得られることが明らかになった。



ミーティングの様子。始めに祈りを捧げる。

○和解について

和解の手順として、まず ARTCF の Field officer が和解のためのトレーニングを行う。これにより、皆一緒の人間であるということに気付き、民族関係なく同じ「ルワンダ人」として物事を一緒に行ったり、結婚したり、パーティーに招待したりするようになるという。トレーニングだけでなく、毎週のグループミーティングもメンバーにお互いのことを知り理解する機会を与えている。実際に、ジェノサイド時に、夫がフトゥ族であったトゥチ族の 52 歳の戦争寡婦は、マイクロセービングに参加することによって変わった。ジェノサイド終了後に夫を亡くした彼女は、トゥチである自分の両親と、夫側のフトゥの家族の板挟みに遭い、当時は誰も受け入れなくなったが、マイクロセービングに参加後、誰もが他人を必要としていることが分かり、今では差別せず全ての人と協力できるようになった。彼女はマイクロセービングで生活が大変良くなり、Ruhango 地区とケア・インターナショナル (国際 NGO) からマイクロセービングの成功者としての証明書が送られた。さらに、彼女は現在南部にある 50 の村の代表として、マイクロセービンググループを支えている。フトゥの男性の J さんも、マイクロセービンググループに参加してから半年ほどでトゥチを受け入れられるようになったと言う。

まとめると、マイクロセービングはルワンダの再建に大きく貢献していると言えることが分かった。以上が、今回のフィールドワークで得られたことである。最後になるが、ルワンダでは未だに民族差別が残っている。NGO で働いているある男性は、国会議員や地域(district)、市(secteur)、村(cell)の長は、大半がタッチによ

って占められていると教えてくれた。彼の、「本来は上から変わるべきなのに、下の方が和解をしようと努力している」という言葉が心に響いた。今後、ルワンダがどう変わっていくのか、どのように成長していくのか、引き続き勉強していきたい。

下道 佳織(津田塾大学学芸学部国際関係学科2年)

マイクロセービンググループで生活を立て直した女性たち



ウサギ、羊、ラジオを買うことができ、彼女と7人の子どものための健康保険料も支払えるまでになりました。

ジュディス・ニランタラマさん(51)は7人の子どものもつ女性です。2002年に彼女の夫は亡くなり、彼女が一人で子どもたちを養うこととなりました。しかし貧困と飢えにより5人の子どもはルワンダ語の「マイボボ」、いわゆるストリートチルドレンにまじりました。ジュディスもまた村の市場で物乞いをするようになりましました。しかしながら2014年11月に彼女は村人たちから、村のマイクロセービンググループの一つ“TWITEZIMBERE”のメンバーに選んでもらいました。彼女はその後、グループの一員となって毎週の積立金を払うようになりました。それだけでなく彼女はグループの積立金からローンを組んで3000ルワンダフラン(約500円!)を借り、トマトや小魚を売る商売を始め、その後、バナナや他の野菜も売り始めました。彼女の商売は順調に進み、ストリートチルドレンになった5人の子どもたちも家に帰り、彼女は家族のために食べ物や服などを得られるようになりました。さらに彼女は

マディナ・ムロンクウェレさん(35)は3人の子どもの持つ母親です。彼女は2014年12月にマイクロセービンググループの一つ“TUZAMURANE”の一員となりました。「はじめ誘われた時は断ろうと思いましたが、毎週100ルワンダフランを積み立てるのは困難だと思ったからです。でもグループに入れば何らかのサポートがあるだろうとも思い、参加することにしました。何日か経つと、ほかのメンバーが積立金からローンを組んで小規模のビジネスを始めているのを知りました。でも私は返済できるか不安でローンを組もうとは思いませんでした。ある日、ARTCFのスタッフが来て、同じようなビジネスをすすめてくれて、1,500ルワンダフラン(約250円)を借り、ウドッセケ(ルワンダの伝統的な籠)を作る材料を買いました。私はウドッセケを2つ作り、7,000ルワンダフランで売ることができました。利息を含めてローンの返済も終え、毎週の積立金も1口から4口まで増やすことができました。これらきっかけで、村のウドッセケ作りをする女性たちの組合にも参加するようになりました。私はさらに材料を買ひ足し、7つのウドッセケを作り、24,500ルワンダフラン(約4,000円)で売りました。この収益で私は豚を3頭とトタン屋根を2枚買いました。私はこのビジネスを続け、鶏を7羽と携帯電話を購入しました。」その後マディナは豚2頭と鶏6羽を売り、そのお金で家のドアを2枚と窓のガラス、そして夫の分の携帯電話も買いました。



アフリカ平和再建委員会

Africa Reconciliation Committee: ARC-JAPAN

〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-6-1 四谷サンハイツ511号室 Tel./FAX: 03-3351-0892

E-mail: headoffice@arc-japan.org ホームページ <http://www.arc-japan.org>



ツイッター アフリカの紛争と平和に関するイベントや情報の発信をしています!

@ArcJapanNews どんどんフォローしてください!



フェイスブック 日頃のARCの様子やプロジェクトの近況、アフリカ関連のイベントや情報の発信をしています!

[ARC ページ] <https://www.facebook.com/ARCJAPAN/> “いいね”、“シェア”をお願いいたします。